

がん診療連携拠点病院 PDCAサイクルの確保について(2020年度実績)

	担当部署	対象項目	目標	施策	当年度実績	評価と改善策
診療機能や診療実績	呼吸器内科	肺癌について、初診時から6週間以内に治療(内科的治療)を開始する割合	90%	初診後の諸検査を迅速に行い、診断をつけて治療計画を立てる。退院促進を行い、病床回転率を上げて迅速な入院が可能となるようにする。 治療開始日が初診日から6週間を超えたものについては、その要因を分析し、改善策を検討する。  近年、肺癌診断確定後に組織の遺伝子検査(結果判明までに最低2週間かかる)を行い治療方針を決定するケースが増えており、検査会社とも連携を取り、迅速な結果判明に努める。	96.1%	目標を達成できている。 引き続き、検査を計画的に効率的に行うことと、適正な患者数の調整に取り組む。
	呼吸器外科	肺癌術後平均在院日数の削減	7日	術後在院日数に直接かかわる術後肺癰を減らし、またドレーン抜管後翌日退院の原則を徹底する。	7.4日	目標の平均在院日数をほぼ達成できた。 術後合併症発症予防に努め、可及的にドレーン抜管翌日の退院を目指す。
		原発性肺癌手術件数	230件	可能な範囲で手術適応を拡大し増加を図る。	205件	手術枠削減や新型コロナの影響により肺癌紹介患者が減少したため、目標値を達成できなかった。 手術枠が回復するまでは大幅な手術件数の改善は期待できない。可及的に与えられた手術枠を埋めるように、手術予定を綿密に調整する。
	放射線治療科	有症状多発脳転移への早期緩和照射(全脳照射)開始	月平均4.0日以下	他科からの紹介の中から緊急性のある有症状症例をピックアップし、症例の優先順位を付けた上で治療スケジュールを柔軟に運用することで有症状多発脳転移全脳照射開始までの期間の短縮を図る。また、そのための障害となっている事象について分析し、改善を講じる。  2019年度のモニタリングでは、ほぼ目標値の月平均4.0日以内を達成できたが、休日の多い月で満たせない場合があった。 カンファレンスにおいて、各症例における治療優先順位まで含めたディスカッションを徹底する。	月別平均1~3日 年間平均1.8日	月平均最長で3.0日以内と、目標値の月平均4.0日以内を全ての月で満たすことができたが、休日が続くことと延長する傾向は残る。 カンファレンス、勉強会等の機会を使って教育指導を行った。
実績や活動状況	外科	胃がんの地域連携パス実施数	50	2018年度に著しく減少したが、改善を図り2019年度は大腸がん、乳がんに関しては適用数が増加した。胃がんに関しては適用数減が続いている。連携パス導入を定着させるため、引き続き2020年度もパス適用数増加を目標とし、地域医療連携室で毎月集計する。	27	大腸がん、乳がんに対してはおおむね目標達成。胃がんの適用症例数が増えない原因の究明が課題。 4月の新入職員入職に合わせて、医局員へ連携パスについて周知する。胃癌・大腸がん患者に対しては全例適用の有無確認のチェックシートを術後担当医に配布する。
		大腸がんの地域連携パス実施数	60		64	
		乳がんの地域連携パス実施数	50		48	

がん診療連携拠点病院 PDCAサイクルの確保について(2020年度実績)

	担当部署	対象項目	目標	施策	当年度実績	評価と改善策
がん患者の療養生活の質	緩和ケア科	がん入院患者における「生活のしやすさ質問票」(がんの苦痛に関するスクリーニング)の施行率	-	がん入院患者の苦痛症状をより積極的に拾い上げ、これに対応することは医療の質向上に欠かせない。4半期ごとに評価を行い、結果は緩和ケアチームで把握するとともに緩和ケアリンクナース研修会でフィードバックする。	-	実施率は徐々に上昇しており、65%弱にまで向上してきている。緩和ケアリンクナース研修会で実施状況を各部署にフィードバックする。
		緩和ケア病棟入棟までの待機日数	-	緩和ケア病棟入棟希望者にとって、待機日数の短縮は重要な患者ニーズである。毎月入棟待機日数の平均値を算出し、4半期ごとに緩和ケア病棟運営会議で評価する。	-	1年間、安定して2～3日で推移している。
		院内麻薬の使用量(がん患者に対する使用量の代替として)	-	がん患者に対する適切な麻薬使用向上を目指し、院内麻薬の年間使用量を把握する。	-	概ね横ばいで推移している。